

III はなやかな展示場

鈴木 耐 元 (地質情報センター)・盛 谷 智 之 (海洋地質部)・広 山 禎 子 (国際協力室)
Yasumoto SUZUKI Tomoyuki MORITANI Teiko HIROYAMA

国際会議場一階正面を入り、右手にあるエスカレーターで二階に上がったところが、展示会場の入り口である(写真1)。エスカレーターを降りたところには女性ガードマンが立っていて、万国地質学会議の登録に際して渡された名札やバッジを着用していない人をチェックしていた。いくつか並んだ扉を押して中に入ると、天井の高い、柱のない広い室内に、思い思いに仕切って、各国の様々な機関の展示がおこなわれていた。

展示機関は、各国の地質調査機関、民間の地質調査会社、化石や岩石・鉱物をあつかう商社、宝石商、本屋などで、いずれも展示にいろいろ工夫をこらして、たいへん楽しい見ものであった。

各国の地質調査機関のなかで、主催国アメリカの地質調査所が右手奥にもっとも大きな区画(ブース)をとって、その活動を紹介する充実した展示を行っていた(写真2)。一つひとつの区画で鉱床探査(写真3)、放射性廃

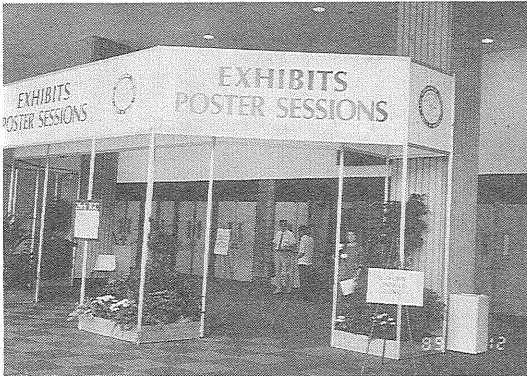


写真1 展示とポスター・セッションの会場入口

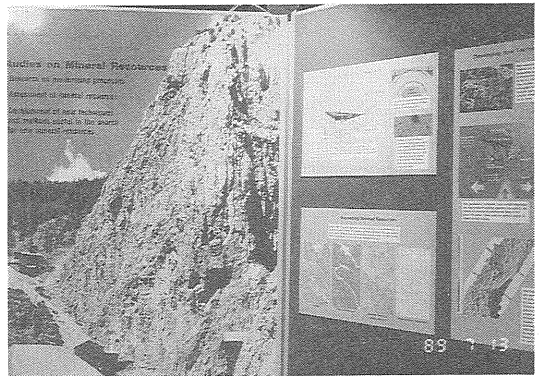


写真3 USGSの鉱物資源研究コーナー。鉱床形成機構の研究、鉱物資源評価の研究、鉱物資源探査の新しい技術や方法論について解説している。

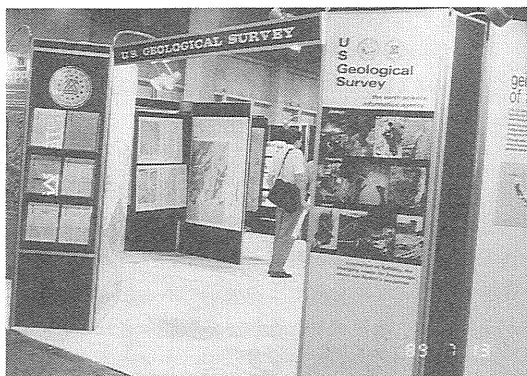


写真2 アメリカ合衆国地質調査所 (USGS) の展示会場。科学の発展に伴う資源探査の必要性を解いている。

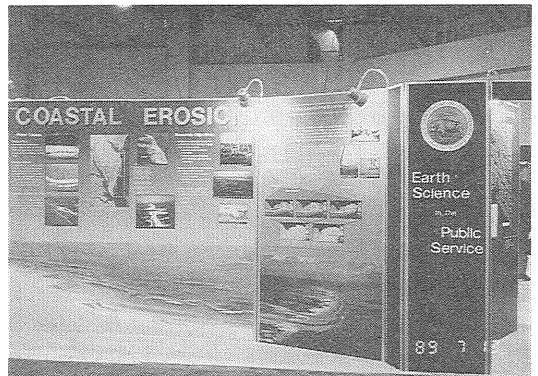


写真4 USGSの沿岸侵蝕の研究コーナー



写真5 ペンシルヴァニア州地質調査所の展示。1859年 E. L. Drake が、パイプによるドリル式さく井法で世界最初に原油掘削に成功したときの坑井“ドレーク井”の模型が展示してあった。これからオイルラッシュが訪れることになる。

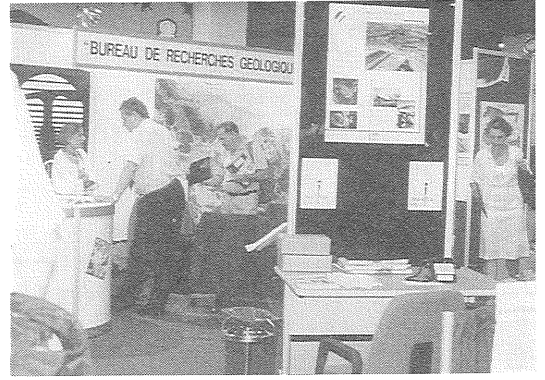


写真7 フランスの BRGM の展示会場。大きなフランス全土の地質図を正面に展示して、現在の研究を紹介していた。



写真6 カナダの地質調査所の展示会場。大きなスペースを取り、エネルギー、鉱山、資源をテーマに充実した展示をしていた。

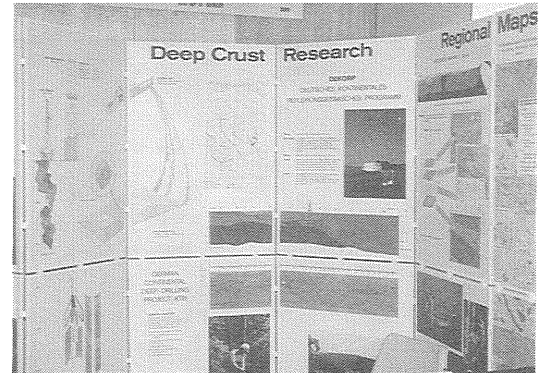


写真8 ドイツ連邦共和国の展示の一部。同国では、近隣諸国とも協力して深部地震探査をおこない地殻の深部構造を明らかにし、深部ボーリングでそれを確認することを計画して、世界的に注目されている。

棄物処理、水資源探査、環境保全(写真4)、地震予知と災害予防など、現在社会的に問題になっている課題への取り組みを紹介していた。ここでは、見学者に世界の地震活動図をお土産にくばっていた。アメリカの世界への貢献をPRすることを意図したものであろうか。

アメリカは、国の地質調査所以外に各州が地質調査所をもっているが、それらは左側にそれぞれ二区画くらいをとって、各州の地質と地質調査所の活動を紹介していた。その紹介もそれぞれ工夫をこらしていて、ペンシルヴァニア州立地質調査所は、世界初の機械掘り成功井として知られるドレーク井の模型を展示していたのが印象深かった(写真5)。各調査所は、絵葉書大の州の地質図を見学者に配っていた。

各国の地質調査所も、楽しい展示をしていた。カナダ

(写真6)、フランス(写真7)、西ドイツ(写真8)、イタリア、オランダなどは、比較的大きなスペースをとっていた。西ドイツの深部ボーリングを目玉にした展示が目立った。日本は2区画であったが、上記各国は、日本の2倍位のスペースで、充実した展示であった。北欧のノルウェー・スウェーデン・フィンランドは共同して展示をしていた。ソ連は、6区画取っていたが、地質省と科学アカデミーが半分ずつ展示を受け持っていた(写真9)。地質省の大きな地質図が目立った。中国は、地質代表団の展示として4区画を取っての展示であった(写真10)。最近刊行された地質図や出版物が多数展示されていた。その他の社会主義国ではポーランド、チェコスロヴァキア(写真11)が充実した展示を見せてくれた。

環太平洋エネルギー鉱物資源委員会は、最近刊行した

地質図類を展示していた(写真12)。

アメリカ石油地質家協会は、入口近くに大きな一面をしめて、同協会発行の刊行物の販売をしていた(写真13)。ディスカウント・セールで、客も多く、売れ行きもかなりよいように見受けられた。その他、自然科学関係の出版社がそれぞれ最近の刊行物をならべ、割引値段で販売していた。日本で買うよりも大分割安であったが、懐具合、帰りの荷物などを考えて買い控えてしまった人が多かったのではなかろうか。また新しい雑誌を刊行し、それを無料で配っているところもあり、IGCにかける熱意を感じた。

岩石・鉱物・化石標本を売る店もでていた(写真14)。立派なものが多かったので、大分客が群がっていたが、売れ行きの方はどうだったであろう。宝石商も入って、“お買い得品”などもならんでいた。



写真11 チェコスロヴァキアの展示会場
手前中央はアメリカ合衆国 NOAA の展示



写真9 ソ連の展示会場。右の3コーナーは地質省によるもので、各種の地質図を展示し、資源探査の現状など、左の3コーナーは科学アカデミーによるもので、各種の研究を紹介していた。

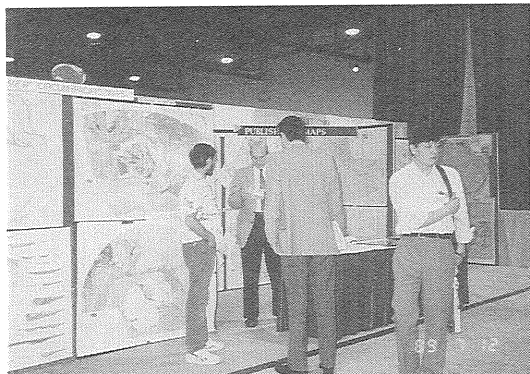


写真12 環太平洋地区委員会の展示。新しい出版物を展示していた。

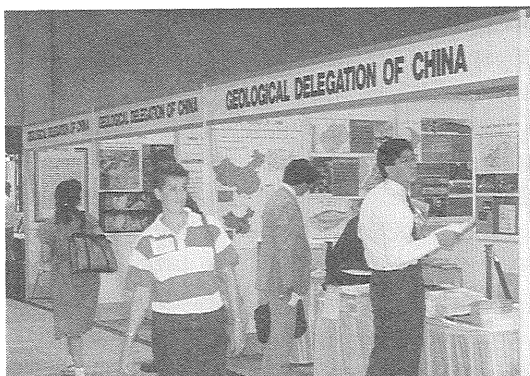


写真10 中国の展示会場。中国は代表団により、各種地質図、出版物などが展示されていた。

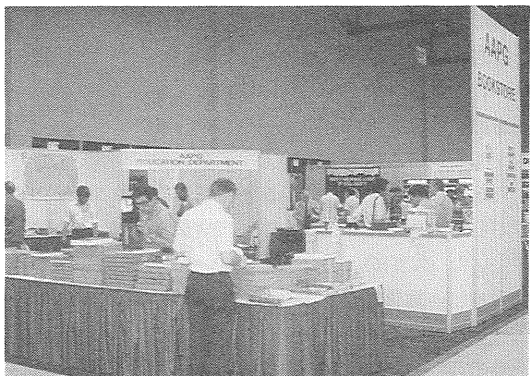


写真13 アメリカ石油技術者協会の書籍販売場



写真14・鉱物、化石の販売店

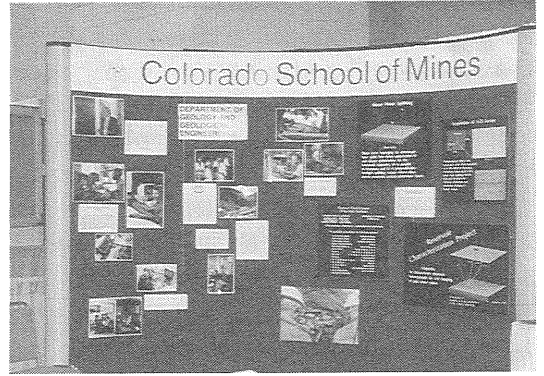


写真16 コロラド鉱山大学の展示。日本の地質調査所の前に陣取り、大学における教育と研究の紹介をしていた。



写真15 シュランベルジャー社の展示会場。左手に飲み物提供コーナーが見える。

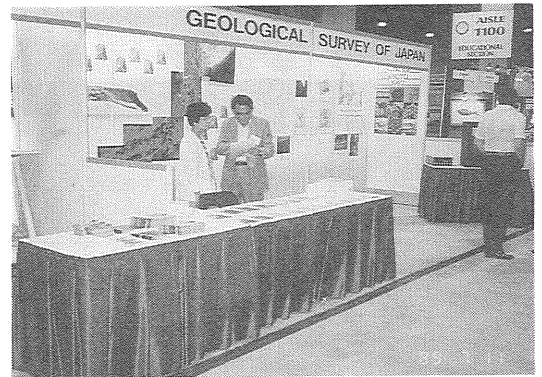


写真17 地質調査所の展示。右手で大島の噴火のビデオテープを流している。左手は29回 IGC 組織委員会。中央から左手の机の上には、絵葉書などの無料配布物が並べられている。

民間会社は、それぞれデータ処理技術をきそった展示をしていた。しかし、人の集まりはいま一つというところであった。ただし、世界的な検層会社シュランベルジャー社は別格で、会場中央に陣取り、大きなやぐらの模型をたてて、美人がココアやコーヒーの無料サービスをしていて、終始多くの人でにぎわっていた(写真15)。

なおアメリカでは、古い伝統をほこるコロラド鉱山大学が日本のまえに二区画を取って宣伝をしていたのが目についた(写真16)。

日本は、地質調査所が二区画、第29回万国地質学会議組織委員会が一区画となり合わせにとって、展示と日本への招請の宣伝をしていた(写真17)。地質調査所は、コンピューターで打ち出した鳥瞰的地形図上に地質図を描いた100万分の1の図を中央に、右手にわが国最初の広

域地質図、200万分の1北海道、それを作ったアメリカ人の地質学者ライマンとその弟子の写真を配し、左手にはわが国の代表的な火山と地熱開発状況を示す写真を展示した。右手のバックには、ライマンの弟子が発見に大きな役割を果たした石狩炭田の地質図、左手には日本の火山地質図を飾った。展示物の前では、1986年の大島の火山爆発の模様をビデオテープで流した。これは、火山爆発の音も入っていることもあって、多くの人の足をとめて好評であった。展示物の前にならべられた机の上には、展示物の説明パンフレット、絵葉書大の日本の地質図、コンピューターで打ち出した日本列島の鳥瞰図を置いて、見物の人達に配ったが、これもなかなか好評であった。展示には、いつも地質調査所関係者がはりついていて、通りがかりの人達に積極的に声をかけたことも良かったように思われる。

地質調査所の隣の組織委員会の展示は、次の開催

地京都の宣伝ポスターで、こちらもパンフレットを置いて、いつも関係者がはりつき、積極的に見学者に声をかけていた。また、次回の京都会議への希望のアンケートを配り、回収していた。

この一角は、日本人参加者のたまり場にもなり、次回の京都会議への意欲を高める役割りも果たしたのではないと思われる。

このように各国それぞれ工夫をこらして展示し、1人ないし2人あるいはそれ以上の人がはりついていたが、訪ねる人に笑顔で積極的に対処している所では、話もは

ずみ、お土産の印刷物もさばけていた。展示会場の入り口の一角は、ポスターセッションの会場になり、展示会場ともども、終始各国の人達で賑わっていた。

展示は、各国かなりお金をかけた立派なものであったが、おそらくすべて専門家によるものと思われる。今回は日本であるが、かなりのスペースをとって日本の地質を解説し、その調査研究活動を紹介することが要請されるものと思われる。今から地質調査所はじめ各機関でその事業を考えておいた方が良いと思われる。

IV テクトニクス分野の研究動向

加藤 碩一・木村 克己 (地質部)
Hirokazu KATO Katsumi KIMURA

IGC 第28回総会開会式では、国際協調の一層の必要性や災害・環境問題に対する地質学のさらなる貢献が求められたが、プログラム全体から分野別に各セッションをみるとテクトニクス・資源関係が著しく多く、この傾向は次回の第29回総会にも続くと思われる。テクトニクス関係は、プレートテクトニクスに基づくものが大部分で *inter plate* と *intraplate* のテクトニクスに大別して各セッションが組まれているような印象を受けた。しかし、各セッションの中身は必ずしも統一されておらず、雑然と組まれたものもある。いわゆる小構造の解析や変形構造のメカニクスといった日本の構造地質学で比較的興味をもたれている分野の講演は少なかった。会議の性格上、いわゆる大構造論的な議論が豊富な地球物理学データを駆使して論じられる場合が多い。新奇なテーマとしては惑星のテクトニクスが注目される。

自明のことではあるが、コンビーナーの熱意と力量がセッションの成功に決定的な影響を与える。しかし、ある程度はやむをえないこととはいえ、キャンセルの多さや突然の時間の変更には閉口した。また、セッション間の連絡は難しいせいもあるが、共通したテーマはなるべく上手く案配してもらいたいものである。例えば近年関心を集めている *pull-apart basin* についても各セッションにばらばらに入っておりまとまりが良くない。第29回総会では *interdisciplinary* なセッションを強調しようとしているのでこうした点をとくに留意してもらいたい。

また、以下に「地域地質」としてあげたセッションが
1989年12月号

第29回総会プログラムではあまり考慮されていないように感ずるがどうなのか。島弧に焦点を絞るのはよいとしても、やはり国際地質学会であり、世界中から参加するのだからこうした各論的な分野もかかせないと思う。日本側のコンビーナーの人選は頭が痛い問題ではあるが。

次に筆者らの好みと独断で、第28回総会におけるテクトニクス関係のセッションを選んで仕分けし、若干の感想を付した。ただし、筆者らはすべてのセッションに出席したわけではないことをおことわりしておく。

(1) 一般

セッション名としては、まったく魅力の感じられない名前ではあるが、こうした包括的なセッションも運営上は必要ではある。

(a) Tectonics and Structure

ポスターセッションで、南メキシコの古地磁気・太平洋地域の古地理・安定大陸の地震などについて呈示してある。

(b) Structure

山脈・褶曲帯・造山帯の構造を示し、さらにモデル化・理論的解析結果を呈示したものである。

(2) 地域地質

必ずしも厳密な区分ではないが、主要な大陸や海域別に地質のみならず地物・地化学データを取り扱ってその